

複数校の生徒が混ざり、切磋琢磨することで視野を広げて自分の生き方を見出していく

**初対面の生徒同士で
探究的な授業を受ける**

中学卒業生のほぼすべてが高校に進学する一方で、社会の急激な変化によって卒業後の進路がますます多様になっていくと予想される高校の現場。そのなかで石川県教育委員会は、これまでの教員個々の力による指導には限界があると考えていた。また、地形が縦長の同県では、県北部や南部の生徒たちが他校の生徒の様子を知る機会が少なく、狭い世界でしか自分の位置づけを知ることができなかった。

こうした課題に対し県教委では、生徒の思考力・判断力・表現力および、主体性をもって多様な人々と協働する力を育成することを目的とし、2015年3月に「石川県高等学校『学びの力』アクションプラン」を策定。そのなかで、複数校の交流の場を設けて、生徒には幅広い刺激を受ける機会を、教員には学校や教科を越えた教育力の向上を目指した取り組みをスタートさせた。

そのひとつが県内の大学進学者の多い学校14校を対象とした「いしかわ探究スキル育成プロジェクト」だ。

「このプロジェクトの前身として、2012年度から県下8校による『高等学

校連携による教育力推進事業』を実施していました。各校から英語、数学、国語、理科の各教員1名ずつが集まり教科別のプロジェクトチーム（以下PT）を組織し、PTごとに教材や指導方法を議論し、8月と12月の年2回、対象校から各20名前後の生徒を集め、合同セミナーで授業を行いました。各校の生徒を混ぜ合わせたクラス編成のため、実施する教員と生徒たちがお互いほぼ初対面という状況でした」（梅本浩照氏）

この事業のキーワードは「切磋琢磨」。その意図通り、よい刺激を受けた生徒は学習意欲が高まり、教員は授業の視野が幅広く広がっていったことから、さらに学校の数を増やし2015年から現在のプロジェクトへと進化させた。

「以前は、思考力を兼ね備えた受験スキルのアップに重点が置かれていたが、現在は『探究力』により重点を置き、アクティブラーニング（以下AL）を取り入れた探究型授業スキルの向上を目指しています。また、本県では『いしかわニュースーパーハイスクール（以下NSH）』に5校を指定し、探究的な学びの充実を図っています。現在のプロジェクトには、従来からの8校に、NSH5校と、併設型中高一貫校1校の6校をプラスし、14校で実施しています」（樋口勝浩氏）

**視野が広がり視点が上がり
ひと皮剥けていく生徒たち**

現在のプロジェクトでは、AL型授業実践と生徒同士の対話の場となる合同セミナーは年1回開催とした。回数は減ったがその分、各校でPTを組織し、事前に先進校視察や校内研修会など準備の時間を十分にとれるようになった。合同セミナーは習熟度別に、従来の8校を「探究基礎グループ」、新設の6校を「探究発展グループ」の2グループに分けて実施。それぞれ、県外から講師を招いた講演、他校の生徒同士によるディスカッションや授業の実践を行っている。

ディスカッションでは「学校横断で学園祭をやるとしたら」など、生徒に身近で協働的なテーマについて50分間語り合う。

合同セミナーに参加した生徒、教員の感想は次ページに記したように、予想以上の効果を感じている。参加した各授業について生徒に対して行ったアンケートでも、「モ

いしかわ探究スキル育成プロジェクト「合同セミナー」

実施される合同セミナーは、県外からの講師による講演、生徒同士のディスカッション、模擬授業の3部構成で実施。生徒はそれぞれ2コマの授業を受ける。



生徒の論理的思考力の育成につながる授業づくりのために、セミナーに先駆けて教員の合同研修を行っている。



合同セミナーには約120名の生徒が参加。集まった生徒も緊張している様子はない。

初対面同士でもお互いに活発に意見を交わす生徒たち。

「同じ学年で習熟度が近い他校の生徒が肯定的な回答をしていた。『初対面の他校の生徒の前でちゃんと意見を言えて自分で驚いたという生徒もいます。日頃の授業でもブレゼンやAL型授業を受けているので、環境が変わっても自分に求められることに気がつくよう、それが自信にもつながります』（梅本氏）

取材文／長島佳子



課題研究合同発表会



第1部ではグループ代表者が全員の前で研究内容を発表。



第2部はポスターセッション。参加者からの質問にも堂々と答える生徒たち。



事務局 学校指導課
高等学校教育担当
課長補佐
樋口勝浩氏



事務局 学校指導課
高等学校教育担当
課長補佐(取材時)
梅本浩昭氏



事務局 学校指導課
高等学校教育担当
課参事
北島公之氏

参加者の声

合同セミナー

【生徒】

- みんなで話し合ったり、一緒に考えることで理解が深まり楽しかった。
- 誰かに何かを話し、考えを共有し、深く学び合うことの素晴らしさにびっくり。
- どんなに難しい問題でも協力すればできる。あきらめずに考えることが大切。
- 他校の生徒と一緒に授業を受けることで、他校とのレベルの差を痛感した。よりいっそう勉強しなければという気になった。
- 自分で考える力の他にも相手に伝える力が必要だとわかった。伝える力をもっと磨いていかねばならないと思った。
- 数学で、ひとつの問題でもみな解き方がさまざまで、いろいろなやり方で理解していくのがとても楽しかった。

【教員】

- 見知らぬ人と共に受ける授業は生徒にとってよい経験となっている。
- 奥能登の生徒にとっては、多くの同期の生徒と関われる貴重な機会です、継続してほしい。

生徒たちが、自分より高い視点をもつ姿を見てショックを受ける生徒もいます。それに気付けば自分もがんばろうという意欲になるからです。他校の多様な生徒との関わりで、自身の興味や

参加者の声

課題研究合同発表会

【生徒(他校の発表を見て)】

- 共感しやすい題材で、分析方法もユニークだった。
- プレゼンの資料の完成度が高い。
- 細かい数字までちゃんと調べてあり、データの裏付けがしっかりしている。
- これまで考えなかった視点から農業問題に取り組んでいる。
- 課題とその解決策が具体的に述べられているなど、提案に対する結論が明確である。

【教員】

- テーマの選び方や探究の方法に各校の違いが表れていて興味深かった。
- 仮説→調査→検証→結論といった流れが、生徒に定着しているのがわかった。
- 質疑応答も批判的思考を働かせたものが多く感心した。こうした力は従来の教授法では身に付かない。生徒主体の探究活動によって得られるものの大きさを実感できた。

課題研究の発表会を複数校合同で行う

同県が行っているもうひとつの複数校交流に、NSH5校の「課題研究合同発表会」がある。NSHのうちの3校はSSH(スーパーサイエンスハイスクール)指定校のため、従来からSSH研究発表会を3校合同で実施していた。大勢の人の前でプレゼンしたり、他校生

関心が広がり、進路選択で志望を妥協しないなど、より高みを目指す生徒が増えています(北島公之氏)

段階を踏みながら自分のあり方が見えてくる

樋口氏) 複数校をまとめて交流の場をつくることは、県教委としても簡単な取り組みではない。しかし教育における多様性として必要なことだと北島氏は語る。

「教育における多様性とは、第1段階で人と自分の違いを理解し価値を認め、第2段階でまわりの人や時代のニーズを把握し、第3段階で自分のあり方や生き方を考えていくことだと思えます。単に多様な状態というのは、ともすれば異なる人々が勝手気ままに振る舞うことになりかねませんが、教育においては、この3ステップを踏む中で、まわりの人と切磋琢磨しながら、自分を高めていくことが求められています。それを実現するために、複数の学校の生徒が集まることでより多様な場をつくり、探究し学び合う本県の取り組みは、他県にはない誇れるものだと思います(北島氏)

複数校が混ざり合うことで化学反応が起きている石川県。次はどんな施策が繰り広げられるか楽しみだ。



県教委が今年制作した、県内の基幹産業の経営者にインタビューした映像集「I Will」。

Editor's Voice

学校単位や教員単位でも可能な取り組みのヒントがある

学校間連携という同世代での横の連携に加え、石川県教委では県内で活躍するさまざまな社会人の生き様のインタビューをまとめたDVDを作成、県内の全校に配布している。これは「地域で生きる人や、時代のニーズを把握」することで、生徒が学校間を超えた多様な価値観に触れることを目的としている。しかし、このような複数校での学校間連携や、多数の社会人インタビューなどは、実際に学校単位で行うことは難しいことかもしれない。そこで、まずは近隣の1校との連携や、教員・保護者の人脈での社会人講演など、できるところから同様なタテヨコを意識した多様性の取り組みが行えるとよいのではないだろうか。